

2026 市民広島派遣報告書

～平和の尊さを体験し、伝えるために～



目 次

1	市民広島派遣に参加して	1 ページ
2	派遣者	2 1 ページ
3	行程の記録	2 2 ページ

主催 平塚市

運営 I LOVE PEACE事業運営委員会

平塚市では、昭和60年12月20日に「核兵器廃絶平和都市宣言」^{かくへいきはいぜつへいわとしせんげん}を行って以来、広く各方面に平和の尊^{とうと}さ、大切^{うった}さを訴えけるとともに、「I LOVE PEACE」のキャッチフレーズの下に平和推進事業を行っています。また、この平和推進事業について平塚市では、市民に共に行動することを呼びかけ、これに賛同した市民団体等（平和協力団体・市民）と「I LOVE PEACE事業運営委員会」^{こうせい}を構成し、市民の立場から各種の平和推進事業を展開しています。^{てんかい}

「市民広島派遣事業」^{はけん}は、この平和推進事業の一つとして、原爆投下の日に合わせ、被爆地^{ひばくち}である広島市に市民を派遣しているものです。平和記念式典への参列^{さんれつ}、被爆者の体験談^{ひばくしゃ}、平和関連施設の見学^{だん}などを通して、平和の尊^{とうと}さ、大切^{たいかん}さを体感し、これを一人でも多くの方々に伝えていただくことを目的とした事業です。平成4年の市制施行60周年記念事業として始めたこの事業は、今年で32回目を数えます。終戦から81年、そして平塚市の核兵器廃絶平和都市宣言^{かくへいきはいぜつ}から41年を迎えた今回、9組18人の市民の方々を広島に派遣することができましたことを喜ばしく思います。

このたび、8月5日から7日までの2泊3日にわたる派遣事業の「報告書」^{こうきゅうへいわ}がまとまりました。この「報告書」が、恒久平和の実現^{じつげん}のために役立つことを願っています。

最後に、この事業の実施に当たり、熱意^{ねつい}を持って参加していただいた皆さまに感謝申し上げます。

令和8年9月

I LOVE PEACE事業運営委員会

委員長 眞田晃子

1 市民広島派遣に参加して

- ・この「市民広島派遣に参加して」は、派遣者から寄せられた感想文を取りまとめ、報告書としたものです。
- ・感想文を寄せていただいた派遣者は、21ページのとおりです。(敬称略)
- ・一部、文章校正を行っています。

(1) 小学生の感想文

◎杉村 瀬里

私が戦争や広島について考えるようになったのは学校でおこなった平和学習がきっかけで、日本の先人^{せんじん}の方が経験した現実を知らなければならなかったと思ったからです。

実際に広島に行ってみて初めて分かったことは、被爆地^{ひばくち}である広島という場所だからこそ体感^{たいかん}で気づけたり、伝わったりする気持ちがあったということ。そして私たちが被爆体験者^{ひばく}の生の声を聞ける最後の世代になってしまうのかもしれないということです。だから今回私が経験したことは本当に貴重なことだったのだと気づきました。この広島派遣で私が印象に残ったことは当時中学生の時に原爆被害^{げんぱくひがい}をうけた増岡さんの話です。

建物疎開^{そかい}で働いていた時に原爆^{げんぱく}が落とされ、ふき飛ばされて目が覚めた時には当たり一面が真っ黒で地面にはたくさんの遺体^{いたい}があり、「お母さん」という声や「水をください」、「助けて」の声は何回も聞いたそうです。



増岡清七さんによる被爆体験談

男か女かも分からないくらい顔も肌もボロボロになり、私たちには想像もできないくらい悲惨^{ひさん}な状況だと伝えてくれました。

その後、私が訪^{おもとず}れた平和記念資料館では原爆体験者の増岡さんが話していた通りの焼けこげた人々の写真やボロボロになった洋服が展示されていました。私は正直これが現実かどうか分からないくらい怖くて目をそらしてしまいました。

このような悲惨^{ひさん}なことを二度と繰^くり返さないように、広島では毎年平和記念式典が行われ原子爆弾^{ばくだんはいぜつ}廃絶、戦争反対という広島の人たちの平和への願いが伝え続けられて

いました。

式典では、高市総理をはじめ、市長や子供たちが誓いをこめて話をしていました。

みんなが共通して言っていたことは「核兵器^{かくへいきはいぜつ}廃絶」と「世界平和を伝え続ける」ことが大切と言うことです。

なので私も市民広島派遣を通して、たくさんの人が教えてくれた想いを、今度は私が周りの人に伝えていきたいと思いました。そしてこれからも自分が出来る限りの、平和のための行動をしていきたいです。

◎大山 笑加

私は、市民広島派遣に参加して平和の大切さや、命の大切さを学びました。平和記念式典に出席したり、平和記念資料館を見学したり、被爆者^{ひばくしゃ}の話を書くなど、貴重な体験をしました。特に被爆者^{ひばくしゃ}のお話と、平和記念資料館が印象に残っています。資料館は、うす暗く、とても平和について考えさせられます。資料館には、写真でよく見る有名な、灰になったお弁当箱、くろこげになった三輪車^{さんりんしゃ}。どれも写真で見ると、実際に見ると、本当につらくて、どれだけ原爆^{げんばく}が恐ろしいか、改めて実感しました。原爆^{げんばく}でできてしまった大やけどの写真や、目玉が取れている絵を見て何度も胸が痛くなりました。原爆^{げんばく}で実際に起きたことをこの目で見て、知れて良かったです。

被爆者^{ひばくしゃ}の増岡さんは、14才の時被爆^{ひばく}しました。増岡さんはこう言います。「原爆^{げんばく}で死のうとして死んだのではない。殺されそうになったのだ。」と。私はその言葉で胸が苦しくなりました。死にたくないのに殺される。想像するだけでとても辛い^{つら}いです。今もまだ、このような戦争が世界中で起きています。人を殺し合うのは絶対におかしいと思います。この世界から戦争と核兵器^{かくへいき}がなくなってほしいです。今の平和な日々が当たり前じゃないということを忘れずに過ごしていきたいです。



広島平和記念資料館

◎西崎 圭

平塚市の市民広島派遣に参加して、私は「平和とは何か」を深く考える三日間を過ごしました。

一日目に増岡さんのお話を聞き、胸が締めつけられる思いになりました。一つの爆弾^{ぼくだん}で「いつもの朝」が一瞬^{いっしゆん}で奪われ、橋や川が死体で埋まったという話は、想像を超える悲惨^{ひさん}さでした。また、折り鶴^{けんのう}を献納しましたが、折り鶴をささげる多くの人々の姿からは、戦争をなくしたいという強い願いが伝わってきました。

二日目は原爆^{げんばく}ドームを見学し、子どもサミットに参加し、灯籠^{とうろう}流しを体験しました。

原爆^{げんばく}ドームの原形がほとんど残っていない姿を見て、とても悲しくなりました。子どもサミットで読んだ詩には「人がおぼけになる」という言葉がありました。皮膚^{ひふ}が垂れ下がり、「水、水」と泣き叫ぶ人々の声を聞いた人がそう言ったのだと知り、胸が苦しくなりました。灯籠^{とうろう}流しでは、いろんな人が平和へのメッセージを書き、かつて死体が浮かんでいた川に流していました。たくさんの光が流れていくのを見て、平和への思いを強く感じました。「世界を平和に仲良く」と書かれた灯籠^{とうろう}を見て、嬉^{うれ}しくなりました。



灯ろう流し

三日目の資料館では、錆びた三輪車^{さんりんしゃ}や黒焦げのお弁当箱^{べんとうばこ}など、日常が一瞬^{いっしゆん}で崩れた証^{あかし}を見ました。「水をください」と願った中学生の話を聞き、たくさんの命が失われたことに胸が張り裂けそうになりました。外国から多くの人々が訪^{おとず}れていたことから、世界が広島のことを知ろうとしているのが嬉^{うれ}しかったです。

広島で見たこと、聞いたこと、感じたことを通して私は強く思いました。平和は祈^{いの}るだけでは守れない。感じ、考え、行動することで守られるものだ。一瞬^{いっしゆん}で消えた命を忘れず、「平和とは何か」「戦争とは何か」をこれからも考え続けたいと思いました。

◎大森 茉鈴



原爆の子の像

わたしは、広島はけんにさんかして、戦争は、友達、家族の命をうばうものだと知りました。8月6日8時15分に全て^{すべ}をうばった原ばく。原ばくの子のぞうでは12さいで白血病で亡くなったささきさだ子さんのことを知りました。さだ子さんは2さいの時に原ばくによってひばくしてしまい、さだ子さんはキセキ的にケガはありませんでしたが、12さいで白血病になりなくなっていました。さだ子さんの

同級生たちは、原ばくでなくなった全て^{すべ}の子どもたちのためのいれいひを作ろうと、原ばくの子のぞうが立てられました。平和記念資料館では、ばく発でボロボロになった服を見て、原ばくが落とされた時この人たちはすごく苦しい思いをしたんだなと思いました。やけこげたおべんとう箱の中身が炭になるほど、強い火でもえてしまい、まち全体がすごいばく発だったんだなと思いました。このように原ばくで苦しんだ人たちの事をわすれず、二度とこんな悲しい事が起きない様に平和を大切にしたいと思いました。

◎佐川 綾希

私は、学校やニュース番組などで戦争について聞いたことがありました。それを聞いて八十一年前、今住んでいるこの日本で本当にこんなことがあったのかと信じられなかったです。けれど、このまま戦争を知らずに生活していていいのか、と思いました。

だから私は、自分で広島へ行って戦争について学びました。

八月六日、平和記念式典に参加しました。たくさんの方々が参加していました。平和記念式典では参加している方々全員で八月六日の午前八時十五分に黙^{もく}とうをしました。その時私は、今原子爆弾^{げんしぱくだん}が落とされたのか。あの



平和記念式典

きのこ雲が空へもくもくと上がったのか。と想像していました。黙^{もく}とうが終わると怖^{こわ}い、悲しいなど色々な言葉が次々と頭に浮かんできました。このことは心の底から絶対に忘れてはいけないもの、と思いました。平和記念資料館の資料をみていると体が重くなっていくような感覚になりました。とくに印象に残ったのは被爆^{ひばく}された方々の写真がずらりと並んでいるところでした。そこに私と同年くらいの男の子の写真がありました。そこには「僕がこんなにもやけどをしてしまい、お母さんがかわいそう。」と書いていました。やけどを負っていて痛いはずなのに自分の心配よりもお母さんの心配をしていて私はすごく胸が痛くなりました。

八十一年前、本当に戦争が起きていたのが信じられなかったです。けれど今回初めて広島に行って体験したもの、実際に聞いたこと、見学したものは自分にとってとても勉強になりました。平和について、そして戦争について、自分の目や耳で実感できました。

◎佐藤 遥樹

ぼくが、広島はけんに行って感じたことを3つ伝えます。

一つ目は、平和記念資料館についてです。平和記念資料館の入り口には広島に原爆^{げんばく}が落ちた時から何日か、そして、最後にかく実験が行われてから何日かを表示する時計がありました。こんなにひんぱんにかく実験が行われてると知って、かくをはいぜつしたいと思いました。広島に落ちた原爆はリトルボーイという名前で、そ



広島平和記念資料館

のなかにあるかく物質は40分の1しかかく分裂していなかったのに、それだけでここまでのはいりよくをもっていました。そして原子ばくだんを落とす都市は、広島、長崎、小倉、横はまがこうほでした。長崎には広島に落ちた原子ばくだんよりも大きい原子ばくだんが落ちました。でも広島のほうが死者数が多かったです。なぜかという、長崎の周りには山がありましたが、広島には山がなく平地だったため、ばく風が周囲に広がりやすくなっていたからです。ひばく者のい品では、こげた三輪車^{さんりんしゃ}が有名です。このようなものを見ると心がむなしくなっていく、この建物は、「平和の

ため」「原ばくがどれだけおそろしいかを伝えるため」に建てられたと思いました。

二つ目は平和式典についてです。

平和式典には原ばくで亡くなった人のい族や、高市そう理、そして、広島に平和学習をしに来たわたしたち以外にも世界各国からたくさんの人が来ていました。8時15分、一分間の黙^{もく}とうがかねの音とともに始まりました。そして8時16分にもくとうが終わり、それから原ばくが落ちた時の子供の声のしょう介や、ひばく者の証言など様々な人がおはなしをしていました。せいふなどもさんかするイベントは、きんちょうしたけれど勉強になりました。

三つ目はとうろう流しについてです。

平和式典が終わって夜7時くらいになるととうろう流しが行われました。原ばくが落ちた時、元安川では、水を求めておしよせた人がたくさんいました。放しや線により死んでしまった人たちを追とうするためとうろう流しが行われています。ぼくは死んでしまった人たちをわすれないように、そして、二度と同じことがおきないようにしていることに、一番感動しました。

広島はけんにはわすれられない体けんがありました。広島に落ちた原子ばくだんのことと平和についてたくさん知った夏休みでした。

◎大野 璃心

私は、広島派遣に参加していろいろなことを学びました。

原爆^{げんばく}ドームや増岡さんの話、平和記念資料館などに行って原爆^{げんばく}は怖い^{こわ}なと感じました。

増岡さんの話では、たくさん辛い^{つらい}ことがあり、たくさん辛い^{つらい}思いをして、すごく大変だったのかなと思いました。

お話を聞いてるだけでも怖い^{こわ}くて悲しくなりました。

平和記念資料館では、黒いお弁当箱や三輪車^{さんりんしゃ}、焼けてしまった制服や黒い雨による染^しみが残ったままの制服を見てこんなにひどかったんだなと思いました。

今までは広島や長崎の原爆^{げんばく}のことは見たり、聞いたりしてもそんなことがあったんだと思うだけで深く知



折り鶴献納

ろうとは思いませんでした。でも今回広島派遣に行ったことで、原爆^{げんばく}の被害^{ひがい}を受けた建物や被爆品^{ひばく}が残っていて原爆^{げんばく}の怖^{こわ}さなどに気づいて、自分は関係ないことだと思っていたけど、大変な思いをされた方がいたからこそ、今があるのだと思いました。

平和記念公園で折り鶴を見て、こんなに平和を願って鶴を折って、献納^{けんのう}をしている方がいるんだと思いました。

たくさんの鶴のように、家族や友達など、もっとたくさんの人に、原爆^{げんばく}がどれほど怖^{こわ}いことで、今がどれほど平和か、平和の大切さを伝えることが出来ればいいなと思いました。

◎小川 夏菜子



全国こども平和サミット

私は広島へ行って、たくさんの貴重な体験をしました。その中でも特に心に残ったことが2つあります。まず1つ目は、第2回全国こども平和サミットでの被爆^{ひばく}体験談河野さんのお話です。理由は、お話の中で「目玉が取れて流れていくのを手でおさえていて、腹が切れて内臓^{ないぞう}がたまご焼きのように流れていた。」という話を聞いて、目玉が取れるなんてマンガの世界でしか聞いたことがないし、

内臓^{ないぞう}が出てしまうなんて想像も出来ませんでした。しかし、平和記念資料館に行ったときに、河野さんが言っていた事が絵で書かれていて、その絵を見て「目玉、内臓^{ないぞう}は出てしまうことがあるんだ」と思い、とても怖^{こわ}くなりました。原爆^{げんばく}のことを話すのは、つらいことを思い出してしまつてつらいはずなのに、話してくれて、うれしかったです。

2つ目は、平和記念公園です。数えきれないほどの折り鶴が原爆^{げんばく}の子の像の所があり、こんなにたくさんの人たちが平和を願っているんだとうれしく思いました。

実は、広島に行く前は、戦争のことをどこか他人事に考えていました。しかし広島に行ったことで、今もどこかで平和な日常がうばわれていることに改めて気付きました。

この体験を友達たちに話して、平和を自分たちで作っていきたいと思います。

◎関口 悠馬

ぼくは、市民広島派遣にいろいろなことを学びました。

一つ目に印象に残ったのは、増岡清七さんの^{ひばく}被爆体験談です。

^{げんばく}原爆がおとされた時増岡さんは、10mほどふき飛ばされたそうです。それを聞いてぼくはそんなに力があってとてもおどろきました。



増岡清七さんによる被爆体験談

二つ目は平和記念資料館です。

^{ひばく}被爆された方の服をみてぼくは、^{げんしばくだん}原子爆弾のおそろしさを実感しました。

また一人一人の人生がたしかにあったのだということが分かった時間でもありました。

今回市民広島派遣に参加して平和について、色々なことを考えることができました。戦争は、みんなを悲しい気持ちにさせてしまうので絶対にしてはいけないと強く思いました。

このことを忘れずにまわりの人たちにも伝えていきたいと思います。そして平和な世界をつくるために自分にできることをしていきたいです。

（２）保護者の感想文

◎杉村 博子

今回市民広島派遣に参加し親子共に体感で伝わったことがたくさんありました。美しい街並みの中に、あえて81年前の無残で^{ざんこく}残酷な形のまま残された原爆ドームが放つ空気感。

たくさんの^{いたい}遺体が流されたであろう川の流れ。^{ひばく}被爆体験者の方たちの、言葉では表せない怒りと^{くや}悔しさと無念さを押し殺しながら話してくれた声。その思いを抱きながら今も前向きに生きている姿勢。全てが広島で体感を通して学べたことだと思います。

平和記念式典では多くの国の方が参列し、^{こくれんじむそうちょう}国連事務総長や総理大臣、県知事、子

どもたちが平和宣言、平和への誓いを述べていました。どの方も力強く意志のある言葉で核兵器^{かくへいき}廃絶とその先にある世界^{こくきゅう}恒久平和の実現に向けて尽力するという思いを告げていました。この言葉は唯一の被爆国^{ひばくこく}である日本だからこそ訴えることができ、その責任を戦争で亡くなった方から課せられたのだと受け止めました。

今もなお世界中では戦争や核兵器^{かくへいき}の問題が絶えません。被爆国^{ひばくこく}で育った私たちはもっと歴史を知り、自分たちにできる平和への活動をしていかなければならないと思いました。今回の市民広島派遣がその一步目の行動になるよう、親子共にこれからも今回の経験^{かて}をしっかりと糧にして過ごしていきたいと思います。

◎大山 紘美

小学生最後の夏休み、娘の「参加したい。」の一言で市民広島派遣に応募しました。8月6日の平和記念式典に参列し哀悼^{あいとう}の意を捧げ、原爆ドームを見上げ、平和記念資料館では被爆時^{ひばくじ}の様子が遺留品^{いりゅうひん}と共に目前で伝えられました。

3日間の行程^{こうてい}を通じて強く感じたことは、被爆^{ひばく}された方、戦時下を生きておられた方が減少^{げんしょう}し、直接の体験を語り、それに耳を傾ける機会が年々なくなっていく、という事です。市民広島派遣では被爆体験者の増岡さんのお話を拝聴^{はいちやう}し、子ども達からの質問にも答えていただきました。同じ空間で同じ空気を吸い、会話ができる。戦後81年間できていたことが今後は難^{むづか}しくなっていく、という事です。

第2回全国こども平和サミットに出席した際、国連事務次長の中満^{なかみつ}さんからのメッセージの中で「平和とは戦争のない状態だけではなく、全ての人の潜在的な可能性^{せんざい}を発揮できる状態のこと」とおっしゃられました。様々な価値観を持った人達が対話をする事の重要性と若者達へのメッセージを受け取った時“私には何ができるか”を改めて考えました。私達は被爆体験^{ひばく}を直接^き聴くことができる最後の世代として、広島から、そして私達のまち平塚から発せられる平和への願いを受け継^つぐ行動を日々の生活で行う必要があります。

最後に、市民広島派遣に関わってくださった全ての方々に感謝いたします。ありがとうございました。



◎西崎 幹樹

実は、幼少の頃より祖父たちから聞いていた戦争体験や被爆体験^{ひばく}において、自身に宿る感情は、あれだけの犠牲^{ぎせい}、無差別殺人^{むさべつさつじん}を一瞬^{いっしゅん}で産む核兵器^{かくへいき}を人類史上初めて実戦で使用した米国への憎しみ^{にく}でした。せめて核兵器^{かくへいき}の使用は誤りであったと、今も認めない姿勢に、ひたすら悔しい^{くや}思いがありました。そして同時に、今もなお「核」を抑止力^{よくしりょく}として、「平和を維持する為の必要悪」であるとしている人類の愚かさ^{おろ}を感じていました。

しかし、このたびの広島派遣でその認識が大きく覆^{くつがえ}りました。被爆体験^{ひばく}を語る方々から「恨み^{うら}」や「悔しさ^{くや}」といった感情が微塵^{みじん}も感じられなかったこと。そして同じ広島に訪^{おとず}れていた多くの外国人を見て、日本と相手国の犠牲者数^{ぎせい}を客観的に比較^{ひかく}し、相手国の立場で戦争を感じる事ができたからです。

世界の誰しもが避けたいが筈の「戦争」。そんな誰しもが望む「平和」。その平和のために「仕方なく」戦争しようと決断する。今行われている戦争もこんな「仕方ない」が根底にある。「平和」とはそれほど綱渡り^{つなわた}の中に存在するのだということがよくわかりました。

今までは、心のどこかで日本が戦争に至る「大義名分^{たいぎめいぶん}」を容認する自分がいました。「仕方がなかったのだ」と。

しかし今回の派遣で、原爆ドーム^{げんぱく}を見上げながら、その時代の相手国にも相応の感情と理由があったのだろうと考えられるようになりました。つまり、自分の中にある「被害者意識^{ひがいしやいしき}」に対し、「加害」に対する意識・認識が希薄^{きはく}すぎると感じたことです。日本の過^{あやま}ちを認め、憎しみ^{にく}や怒り、悔しさ^{くや}といった感情のままに子供たちへ戦争や平和を語ってはいけないことを学びました。

なぜ戦争は起きたのか。そして、なぜ核兵器^{かくへいき}を使用するまでに至ったのか。この問いに答えが出なければ、過^{あやま}ちは繰り返されると思います。

昨今の世界情勢^{じょうせい}からみて、今の日本は憲法改正や核共有論^{かくきょうゆうろん}からの非核三原則^{ひかく}の見直しなど、安全保障上の転換期^{てんかん}にあるのは明らかです。

毎日のように報道される戦争のニュースを見て、自分の中にも「仕方ない」が芽生えていました。しかし、この広島派遣を通じて核兵器^{かくへいき}廃絶^{はいぜつ}の初心を思い出し、さらに考えを深めることができました。

唯一被爆^{ゆいいつひばく}を体験した我々には平和と核兵器^{かくへいきはいぜつ}廃絶を訴え続ける使命があります。戦争や被爆^{ひばく}を風化^{ふうか}させないよう語り継ぐ^つこと。これこそが私にできる平和への取り組みであり、未来への責務^{せきむ}だと確信しています。

◎大森 一儀

今回、広島に行く事ができ、平和記念式典や灯ろう流し参加など、貴重な体験をさせていただきました。

原爆^{げんばく}とは、どのようなものか、どのような出来事があったのかを子供に教える事ができ、自身でも見て聞いて確認する事ができました。原爆^{げんばく}の脅威^{きょうい}は、想像^{はる}を遥かに超え、一部の地域ではなく、広範囲に及んでいました。原爆^{げんばく}で一瞬^{いつしゆん}にして亡くなった方、被爆^{ひばく}、被爆^{ひばく}した方々、言葉では伝えきれない悲惨^{ひさん}な状況がありました。

改めて戦争の悲惨^{ひさん}さと命の尊^{とうと}さを強く感じました。一瞬^{いつしゆん}のうちに多くの命が奪われ、かけがえのない日常や家族との時間まで失われました。生き残った方々やその家族にも長く深い苦しみを残した事を知り、胸が痛みました。

原爆^{げんばく}で失われた一人ひとりの命には、それぞれに家族がいて、夢や希望があり、かけがえのない人生があったはずです。その事を心に刻^{きざ}み、二度と同じ悲劇^{ひげき}を繰り返さないために、平和について考え続けていきたいと思います。

◎佐川 正

この度、令和8年度市民広島派遣に平塚市民の一員として参加させていただき誠にありがとうございました。平和の尊^{とうと}さについての学びは現在の学校教育でも行われています。戦後81年経^たった現在では戦争を経験された方と触れ合う機会も少なくなり、戦争の恐ろしさを直^{じか}に教わる事も我々親世代と比べると格段に減ってきたはずです。今回娘と初めて参加させていただき、まさに百聞は一見にしかずという言葉^{ひやくぶん}を身にしみて感じた次第です。原爆ドームを後世に残すかどうか広島市民の間で意見が分かれたと聞きます。当時の苦しい筆舌^{ひつぜつ}に尽くしがたい記憶^{きおく}を呼び戻す存在である建物を二度とあのような戦争、



被害^{ひがい}を繰り返さないために残すと判断された意味を資料館や被災^{ひさい}した建物を見学した事でより深く理解^{りかい}出来ました。

被爆^{ひばく}経験者96歳の増岡清七さんの体験談の中で、あの惨劇^{さんげき}を繰り返さない為にはどうすればよいかと考えた時に「相手を思いやる気持ちを大事にすること」とおっしゃられていた事が強く印象に残りました。実際に被災^{ひさい}された方が、戦争に負けた悔^{くや}しさや恐怖^{きょうふ}や怒りを超えてたどり着いた答えがそれでした。

世界情勢^{じょうせい}は複雑で単純ではありません、その中で先人^{せんじん}たちの犠牲^{ぎせい}の上で築かれた現在の平和のありがたみを再確認し、それを守り平和な社会を子供たちにつなげていかなければならないと強く感じた旅でした。

◎佐藤 明子

戦争というものは国と国との間で生じる争いであり、「武力ではなく互いを理解^{りかい}しあう、対話と協調^{きょうちよう}が平和への一歩」と言われる。しかし、対話とは簡単ではない。なぜなら、相手を受け入れる器がないと成り立たないからだ。協調^{きょうちよう}はもっと大変。自分に不利益なことも、場合によっては受け入れる必要があるからだ。そして、対話も協調^{きょうちよう}も強制されてやるものではなく、お互いが共に歩んでいきたいと思って初めて成り立つということ。主義も国家資源も文化も言語も大きく違う国同士がこれを行っていくことの難^{むづか}しさを思うと、途方^{とほう}に暮れてしまう。私は、改めて戦争をなくすために自分はどう行動したらよいかを考えるべく、今回の広島派遣に参加した。

被爆者^{ひばくしゃ}の増岡さんのお話の中で特に印象に残ったものがあつた。それは、原爆を落とすスイッチを押したアメリカ兵は軽い気持ちで押したのではないはずだ、とおっしゃっていたことだ。同じ人間ならば、軽い気持ちでできるわけがないだろうと。増岡さんは、自身の人生をこんなにも酷いものに変えてしまった敵国兵に対し、「どうしてこんなことをしたのか」とただ責^せめるのではなく、「同じ人間同士なんだ」と相手への理解^{りかい}を試^{こころ}みていた。私は、「同じ人間同士なんだ」という思い、これこそが戦争という手段から対話・協調^{きょうちよう}へと繋^{つな}がる鍵^{かぎ}なのではないかと思った。

さらに、広島派遣を通してわかった大切な気づき、それは、自分の目で、耳で、五感をフルに使って感じ、知ることの大切さだ。

増岡さんは、原爆^{げんばく}の日の前日は日曜日で、珍^{めづら}しく仕事が休みの日だったという話をされていた。たまの休みで嬉^{うれ}しかったと。ほんのささいな情報^{げんばく}だけど、原爆が落



とされた日は、翌日月曜日の朝8時15分、その時間帯ならば仕事に行く方ならどうしていたか、お母さんなら何をしていたらどうか、増岡さんや同級生の方もリフレッシュして持ち場に出たのかもしれない・・・そんなことを自然に想像できるようになっていた。平和資料館に展示されていた^{さんりんしゃ}三輪車は、乗ったまま被爆^{ひばく}し亡くなったお子さんのものだった。

た。きっと、お母さんが朝の家事をする横で^{さんりんしゃ}三輪車で遊んでいたんじゃないか・・・。

生^{なま}の声を聞き、生^{なま}のものを見た私は、原爆^{げんばく}の被害^{ひがい}を、その時の生活や想いを、自分の手の届く^{はんい}範囲まで近くに置いた状態で想像することができるようになった。想像できるということは、理解^{りかい}しようと一歩^ふを踏み出せるということ。この一歩こそが、対話^{きょうちやう}と協調^{きやうちやう}に向かう大切な一歩なのではないか。

戦争^{せんそう}という遠い事のように感じてしまう。けれど、対話^{きょうちやう}も協調^{きやうちやう}も、実は毎日の生活の中で常に身近にあるものだと思う。夫婦間のいざこざ、子どもとの衝突^{しょうとつ}、介護^{かいご}や不登校…どんな困りごとにも必ず対立がある。対立はしこりとして残り、満たされなかった思いは次の世代へと引き継^つがれてしまう。しかし、100%ではなくてもいい、お互いが相手の立場を思い、歩み寄ることができたなら、そのしこりが拡大していくことを防げるのではないか。対話^{きょうちやう}と協調^{きやうちやう}によって、小さなしこりが肥大^{ひだい}し、戦争へと膨^{ふく}らんでしまうことを防げるのではないか。

大人であり、また子を育てる親として、私は自分の身近な人に対し、「あんな人、理解^{りかい}できない」から「どうしてそう思ったんだろう？」と一歩寄り添う行動を取っていきたい。その行動を子供たちに引き継^ついでもらえるように。対話の和が広がり、ひいては世界平和へと繋^{つな}がることを願^{ねが}って。

◎大野 宏美

今回は広島派遣に参加させていただき、ありがとうございました。

私も娘も広島に行った経験がなく初めてだったので、非常に貴重な経験になりました。広島に行くことができただけでなく、平和記念式典に参列させていただき、現場の空気を感じ、貴重な体験ができました。子供代表の方が話していた平和の^{ちか}誓いの

中に「私たちが笑い合っているときにも、^{とうと}尊い命が失われている現状があります。今も当たり前の日常がうばわれています。」と言っていたことが、とても印象に残っています。今日本は平和を^{いじ}維持しています。しかしその中、戦争をして命を落としている人もいます。今のこの日本の平和は当たり前ではないということをしっかり考えなければならぬと感じました。

また、増岡さんのお話では^{はり}針を^さ刺すような痛みだったと聞き、当時の^{ひさん}悲惨な状況を知って^{かく}核の危険さに改めて気付かされました。現代でも^{かく}核戦力は、世界を危険に^{おびや}脅かしている存在です。^{かくはいぜつ}核廃絶に向けて、一歩ずつ進んでいくことが大切だと感じました。

今回広島派遣に行かせていただいたことで、平和についてや、過去のお話を聞いたりなど普段は考えないようなことを考えるきっかけになりました。家族や友人などにも色々話が出来ればいいなと思っております。

貴重な経験ありがとうございました。

◎小川 のり子

今回の広島派遣は、娘の「行きたい」という言葉がきっかけでした。最初は観光目的だろうと思いましたが、この時期に広島を^{おとず}訪れ、^{ひばくしゃ}被爆者の話を聞きたいと興味を持ったことはとても^{とうと}尊いと感じ、参加しました。

私が平和公園を^{おとず}訪れるのは3回目ですが、以前は学生として、今回は「子を持つ親」という立場の変化があり、戦争の^{ひさん}悲惨さをより深く心に^{きざ}刻む機会となりました。

平和式典は、戦争の^{きおく}記憶を^{ふうか}風化させず、今の平和はその経験の上に成り立ち、平和は当たり前ではないことを確認するもの、そして世界では今も戦争が続く現実を^{きょうゆう}共有する場だと思います。また、平和とは「戦争がないだけでなく、いじめや貧困などのない全ての人の^{そんげん}尊厳・^{こうふく}幸福があること」という^{こくれん}国連事務次長の^じ中満泉さんの^む言葉が^な印象的でした。

今回親子で参加することで、体験を^{きょうゆう}共有し語り合えたことは大きな意味がありました。特に^{ひばくしゃ}被爆者の体験談は心に深く残り、直接聞ける機会が^へ減る今、その言葉を大切にし、私たちが周囲へ伝えていく責任を感じています。

広島には多くの外国人も^{おとず}訪れており、世界が関心を寄せていることを^{うれ}嬉しく感じました。この事業に参加できたことに感謝し、今後も平塚の親子が広島を^{ほうもん}訪問できることを願っています。

◎関口 翔子



子どもと共に市民広島派遣に参加させていただきました。

今回の派遣で一番心に残ったことは増岡さんの講演です。私達が会場に到着すると増岡さんは既に到着されており、事前にご挨拶させて頂くと「お役に立てるお話ができるかどうか分かりませんが」と控えめにおっしゃっておりました。

講演が始まると原爆を乗せた飛行機がどこから来たのかを子どもにも分かりやすくお話しして下さるところから始まりました。続いてご自身の体験を話して頂きました。

「あの日は建物疎開をされていてみんなで並んで先生のお話をしている時に原爆が落とされ、吹き飛ばされ、そこから記憶がなく気がついたら倒れていた」とのことでした。そして「生きたい」その一心でその場から逃げたそうです。その後、世界が平和になるための話になり増岡さんは「愛」を大切にし、人に対する思いやりがあれば戦争はおこらず世界平和につながると言っていました。その話は私の心に深く響きました。

増岡さんは自分に怪我を負わせた相手を憎むのではなく他者を愛することを選んだ、そのことに強く感動しました。私はこの講演を忘れずその意思を引き継ぎ、子どもたちにも伝えていきたいと思いました。

その他にも様々な施設を見学し、原爆による被害や市民の皆様がどのような状態だったのかを知ることができました。

今回の広島派遣に参加させて頂き自分が平和な世界に向けて提供できる力は本当に小さなものかもしれないけどその「小さな力」こそが重要なのだと深く実感しました。

次世代の子どもたちにも小さな力でもいい、心で願うだけでもいい、その気持ちがたくさん集まることで戦争のない平和な世界を作るのだと伝えていきたいと思えます。

(3) 事後まとめ会

A班、B班、C班、D班に分かれ、市民広島派遣に参加して「平和について感じたこと、考えたこと」をテーマに、新聞記事や写真等を用いて報告書（壁新聞）を作成しました。

～A班～

作成風景



発表風景



報告書



～ B班 ～

作成風景



発表風景



報告書



A group of people, including students and staff, are gathered around a long table in a room, working on a project. They are looking at and discussing various documents and materials spread out on the table. One person is standing and pointing at a document, while others are seated and focused on their work. The atmosphere appears to be collaborative and focused.

発表風景

A group of people are gathered in a meeting room. A man in a blue shirt and green shorts is standing and presenting to a group of people. He is pointing at a whiteboard that has many colorful sticky notes on it. There are four people standing and listening: a woman in a white shirt, a man in a black shirt, a man in a white shirt and a black cap, and a woman in a black shirt. In the foreground, there are several people sitting at a long table covered with papers and documents. The room has large windows with horizontal blinds in the background.

～ D班 ～

作成風景



発表風景



報告書



(4) その他

8月16日に平塚市総合公園で実施した市民平和の夕べにおいて、市民広島派遣の報告を行いました。



市民平和の夕べの様子

2 派遣者

(1) 派遣者数 9組18人

(2) 派遣者(順不同、敬称省略)

班	氏名	学年
A	すぎむら せり 杉村 瀬里	港小6年
A	おおやま えみか 大山 笑加	崇善小6年
A	にしざき けい 西崎 圭	港小6年
A	おおもり まりん 大森 茉鈴	真土小4年
A	さがわ あき 佐川 綾希	横内小6年

班	氏名(保護者)
C	すぎむら ひろこ 杉村 博子
C	おおやま ひろみ 大山 紘美
C	にしざき もとき 西崎 幹樹
C	おおもり かずよし 大森 一儀
C	さがわ ただし 佐川 正

班	氏名	学年
B	さとう はるき 佐藤 遥樹	花水小4年
B	おおの りみ 大野 璃心	港小6年
B	おがわ かなこ 小川 夏菜子	松延小6年
B	せきぐち ゆうま 関口 悠馬	豊田小6年

班	氏名(保護者)
D	さとう あきこ 佐藤 明子
D	おおの ひろみ 大野 宏美
D	おがわ のりこ 小川 のり子
D	せきぐち しょうこ 関口 翔子

※事務局として、行政総務課職員2人が随行しました。

3 行程の記録

7月21日（火）	事前打合せ会	市役所本館4階410会議室 自己紹介、日程・注意事項等の説明
8月5日（水）	午前 6時00分	平塚駅北口集合
	午前 6時20分	平塚駅発
	午前 10時42分	広島駅着
	午前 11時30分	宿舎着
	午後 1時20分	平和記念公園内原爆の子の像に 千羽鶴を献納
	午後 1時45分	平和記念公園レストハウスを見学
	午後 2時30分	袋町小学校平和資料館を見学
	午後 3時30分	被爆体験者の体験談・質疑応答 増岡 清七 氏
8月6日（木）	午前 8時00分	広島市原爆死没者慰霊式並びに 平和祈念式に参列
	午前 10時00分	第2回全国こども平和サミットに参加
	午後 7時15分	灯ろう流しに参加（元安川爆心地付近）
8月7日（金）	午前 9時30分	平和記念資料館を見学
	午後 2時10分	広島駅集合
	午後 2時43分	広島駅発
	午後 7時30分	平塚駅着・解散
8月16日（日）	市民平和の夕べ	市民広島派遣の報告
8月21日（金）	事後まとめ会	市役所本館4階410会議室 「広島派遣に参加して、平和について感じたこと、考えたこと」をテーマに、壁新聞を作成・発表

かくへいきはいぜつへいわ と し せんげん 核兵器廃絶平和都市宣言

わたくしたちのまち平塚は、過去に戦災を被り市域の多くを焼失した悲しい歴史をもっています。そして今のわたくしたちには、こうした惨禍をくり返すことのないよう、平和を守り次代へ引き継いでいく責務があります。

しかし、現在地球上には、数多くの核兵器が蓄えられ、人類に深刻な脅威を与えています。

世界の平和と安全は、すべての人の願いです。平塚市は、「国際平和の年」を迎えるにあたり、美しい地球と輝かしい未来を守るため、国是である非核三原則の順守とあらゆる核兵器の廃絶を願い、「核兵器廃絶平和都市」を宣言します。

昭和60年12月20日

平塚市



平和モニュメント「マザーアース」